



(1) 登録有形文化財

キャンパスのシンボルである本館やステンドグラスが美しいチャペル・講堂など建築家アントニン・レーモンドが設計した全7棟が1998年、文化庁の登録有形文化財とされた。

(2) 3つのセンター

2024年度からの教学改革に向けた環境整備として、英語力向上のための教育カリキュラムの策定、実施・研究を行う「英語センター」、数理・データサイエンス・AIに関わる教育研究を推進し、急激な社会変化に対応できる人材育成を目指す「AI・データサイエンス教育研究センター」、ICTに関する教育・学修サポート、ワークショップ開催や情報発信などを行う「教育・学修支援センター」が開設された。

(3) 1学部6学科への再編

2025年度から現代教養学部をそれまでの5学科から人文学科、国際社会学科、経済経営学科、心理学科、社会コミュニケーション学科、情報数理科学科の6学科に再編する。人文学科と情報数理科学科を除く4学科では分野を横断して学ぶためコース制を導入し、学科単位で学生募集する。人文学科は4つある専攻単位で募集する。併せて25年度から卒業に必要な124単位のうち、他学科科目10単位が必修となる。

(4) 知のかけはし科目

異なる専門分野の教員2人が一つの科目を担当し、対話を取り入れながら授業を行う。「人文社会横断型」26科目、「自然科学包含型」9科目の全35科目が開設される。自然科学包含型1科目を含む4科目が必修で、そのうち1科目は3年次以上で履修することを条件とするなど、4年間を通して学びを深める。

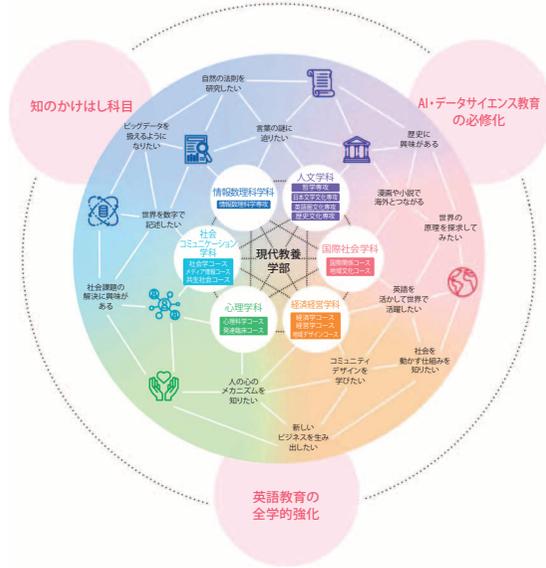
(5) 問いプロジェクト-TONJO QUESTION-

学生にとって身近な疑問や社会課題など、現代教養学部全体と2025年度に再編予定の6学科からそれぞれ容易に答えの出ない「問い」を投げかけ、受験生をはじめ多くの人に東京女子大学の「リベラルアーツ」の学びを知ってもらい取り組み、24年6月3日から新聞紙上や東京都内を中心とした車内広告などで展開。

(6) 知のかけはし入試

2017年度入試から導入された総合型選抜。出願書類、英語資格・検定試験の成績、講義の要旨、小論文、グループディスカッション、面接などによって評価する。23年5月に文部科学省がまとめた「22年度大学入学者選抜における好事例集」に取り上げられた。

新しい東京女子大学の学科ラインナップ



あろうが全ての組織でマネジメントは必要です。どんな分野に進んでもそこでリーダーシップを取れる女性を送り出したいと思っています。そして25年度、リベラルアーツの進化を組織面で整えるため、教学改革第2弾として現行の1学部5学科を6学科に再編のします。

知のかけはし科目が見せたリベラルアーツ教育の神髄。リベラルアーツ教育を建学の精神として掲げながら、戦後の画一化、序列化された日本の大学システムの中で、東京女子大学自身がその意義を見失いかけていた、と森本学長は



もりもり 森本あんり学長
1979年国際基督教大学人文科学科卒業。82年東京神学大学院組織神学修士課程修了。91年プリンストン神学大学院博士課程修了。専門は神学・宗教学・アメリカ研究。国際基督教大学教授、同大学学務副学長などを経て2022年より東京女子大学学長。『反知性主義 アメリカが生んだ「熱病」の正体』など著書多数。

東京女子大学

〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1 広報課 TEL 03-5382-6476 <https://www.twcu.ac.jp/>

新しい「1学部6学科」体制を土台に 女性のリーダーシップを开花させる リベラルアーツ教育のさらなる進化

キャンパスのシンボルに ラテン語で刻まれた「真実」

東京女子大学を初めて訪れる人は誰も正門の奥に広がる光景に息をのむことでしょう。芝生の緑と、それを見下ろす白亜の本館が織りなすコントラストの美には、長い時間だけが作り出せる落ち着きがあります。1931（昭和6）年に建てられ、98年に登録有形文化財となった本館正面の壁に「QUAERUNT VERUM」の文字が刻まれています。新約聖書の一節で「すべて真実なことを」という意味のラテン語です。かつてキリスト教世界の国際共通語だった言語があらわれていることに、中世ヨーロッパで自由な知識人の共同体として生まれ、自由学芸（リベラルアーツ）を重んじた「大学」の成り立ちとの響き合いを感じさせます。

「開学当時の日本にはリベラルアーツという言葉はなかったのですが、特定の仕事に就くためではなく、どんな仕事に対しても発揮できる能力を養うとうたっている。リベラル

アーツそのものの考え方です。新渡戸稲造、安井てつ（初代学監）と並ぶ創立者の一人、A・K・ライシャワー（ライシャワー元駐日米国大使の父）は『東京女子大学はリベラルアーツ・カレッジだ』と言っています。森本あんり学長はそう話します。リベラルアーツはもっぱら「一般教養」とか「基礎学問」などと訳されますが、日本語で明確に定義するのは困難です。「リベラルアーツという特定の科目があるわけではありません。リベラルアーツとはホワット（What）ではなく、ハウ（How）なのです。哲学や歴史、あるいは物理学でも経済学でも何でも、それは材料です。材料をどう扱うのがリベラルアーツです。雑学と言われることもありますが、違います。インテグレート（統合）の力、バラバラな知識を自分の専門と結びつけて考えられる力なので、ただの物知りとは異なります。卒業した後も自ら学び続ける習慣が体に植え付けられる、それがリベラルアーツ教育の目的です」と森本学長は説明します。

データサイエンスを必修化 全学教育の思い切った改革

では、東京女子大学のリベラルアーツ教育とはどのようなものなのでしょう。それを知るには、現在進行中の取り組みを概観するのが早道でしょう。東京女子大学は2024年度、リベラルアーツのさらなる進化をうたい、「教学改革第1弾」と

伝える試みが24年6月に始めた「問いプロジェクト」です。「子どもが成長していく過程で嘘をつくようになるのはなぜか」といった七つの質問が新聞広告などを通じて投げかけられました。容易に答えが一つに定まらない問いに向き合い、リベラルアーツを体感してもらおうというユニークな企画です。

高校生へのメッセージといえば、総合型選抜「知のかけはし入試」もその一つといえます。24年度入試（24年度4月入学）から募集人員が40人に倍増しました。「大学に来て授業を受け、ノートを出して小論文を書き、ディスカッションをして面接を受ける。丸一日かけて受験生を見ようというテストで、とても手間暇がかかりますが、そういうチャレンジを経て入学した学生は伸びる。もっと多くの高校生の皆さんにチャレンジしてもらいたい」（森本学長）

1世紀の長きにわたり継承 男女平等へ「女子大」の使命

日本は24年、ジェンダーギャップ



して以下の2点を実施しました。①全学共通カリキュラムの大胆な改革

②情報数理科学専攻の立ち上げ／経済・経営学分野の強化

①では後述する「知のかけはし科目」の新設に加え、AI・データサイエンス教育の全学必修化、英語で学術論文を書くことを視野に入れた英語教育の強化が図られました。②は25年度の学科再編に先立つて専攻の学びを強化する取り組みです。また、これらの改革に必要な拠点となる3つのセンター①が22年度に整備されました。森本学長は改革の目的をこう話します。

「まずは全学教育を変えることに力を入れています。今の時代、情報に関する知識はどの学科でも必要です。AI・データサイエンスについて全ての学生がリテラシー（基礎）レベルを履修することになりました。専攻の強化では経営学分野で専任教員の配置を増やします。経営学はお金の話だけではなく、人的資源の活用、すなわちマネジメントを扱います。政府や自治体はもちろんNGOや学校、あるいは町おこしの現場で

指数の順位を前年から七つ上げました。それでも118位と世界標準への道のりは険しい。日本が少しでも早く男女平等な社会に近づぐために女子大学の存在意義はあると森本学長は力説します。「リーダーシップが取れる女性を増やさなければならぬのです。国会議員の半数が女性になったら、東京女子大学は女子大であることを再考するでしょう。それまでは女子大学としての存在意義を発揮し続けなければなりません」100年にわたり受け継がれてきた「自立した女性を育てたい」という情熱に共鳴する高校生に向けて森本学長はこんな言葉を送ります。「大学には、高校までには予想もしていなかった学問の世界が広がっています。全く未知の世界に招かれていると思ってください。できれば進路を決めずに大学に来てほしい。決めるのもいいですが、全く関係のない勉強に触れて進路が変わってもいい。そういう「揺らぎ」を許すのが大学なのです。卒業して何になるかなど今の時代、分かりません。だからリベラルアーツの学校に入ってほしい。自由を手に入れてほしいと思います」

